海（かいし）市　No. 35

● 詩

02　前田　勉　　扉

06　横山　仁　　生活の柄（28）

● エッセイ

08　細部俊作　　「ガザに地下鉄が走る日」を読んだ

11　佐藤ただし　　水田とツバメ（33）

15　横山　仁　　雑記（35）

扉

前田　勉

入口のガラスの扉に
階段をのぼる遠い昔の姿が
映っている

本日休

扉の取っ手にぶら下がった木札に
かすれた赤い三文字と
判読できないひと文字がおさまっていた

　そんなに遠いわけでもない

ある日
意識することの無かった
いちにちは
まるで助詞の無い文節のように
小気味よく
短く
今様(いまよう)の思考に沿って変化し
どこか未消化のまま
隠れてしまったようだ

扉を開ければ
その向こう側で
居場所を追われたその時々の眼が
古い
古く
古かった
ものたちと重なって
待ち受けているのだろう

階段の一段ごとに現れては
背後に展開していく鏡映反転の街
誰もいない小路
いつか夢に出てきた
知らない家並みの
その先
が
霞んでいる

開かない扉
扉に映る相似の人影（ひとかげ）
と
それを覆う虚像の家並み

木札の
欠けているひと文字が
みえた

ような気がする

生活の柄（28）

横山　仁

あなたのために
そしてぼくのために
そしてみんなのために
そしてこの地球（ほし）のために

＊「華頂宮チャンネル」締めのことば

腰痛で
重いものをもてない男は
老母の残した杖で

地面をささえる

もろくなり
くずれていく骨
やがて
酸性の土壌で
父母の魂にかえっていく
地球にもどる

新しい種子が
うまれる

「ガザに地下鉄が走る日」を読んだ

細部　俊作

岡　真理　著
二〇一八年一一月みすず書房刊

著者は、パレスチナの現地訪問やウェブ上での交流、通訳としての活動を通じて、多くの人と交流を重ねてきた。例えば難民キャンプでイスラエルによって虐殺された犠牲者の遺族、学生、日本人を含む現地の医師、映画監督、ボランティア、現地から来日して講演した活動家や演劇人等々。また、ガザをテーマにして自身が主宰する朗読劇上演などによってもパレスチナとかかわってきた。

そうしたなかで書かれたこの本は、人びとがガザ地区で生きるとはどういうことかを突き詰め、閉鎖下にあるガザ市民の解放を訴えるものだった。私はパレスチナに関する知識をほとんどもたなかったせいか、そこに生きる人たちの境遇のあまりの過酷さに驚きをもちながら読んだ。

パレスチナ自治区のガザ地区は地中海に面し、南北約四〇キロ、東西約一〇キロ、面積は三六五平方キロ。この狭いところに二二〇万人が暮らしてきた。イスラエルはヨルダン川西岸地区とガザ地区を強固な分離壁をめぐらして封鎖した。西岸地区では、専ら入植イスラエル人用の水源確保のため、一九四九年の合意に基づく停戦ラインを越えて壁が築かれた。ガザからの漁獲水域は制限され、漁船がそれを越えると銃撃される。封鎖によって建築資材が入ってこないため、爆撃で破壊された下水処理施設の再建ができない。電力不足でポンプが稼働しないため大雨が降ると低地では下水が氾濫して洪水が起きる。そんなとき大半の上水道には汚水が混じる。この地域に病弱の人が多いのはそれが原因だといわれる。電気は時間制限が敷かれ、域外との交易はイスラエルの許可の範囲内でしか行えな

い……。これらは〝野外監獄〟などと呼ばれるパレスチナの状況のほんの一例なのだろう。

ガザ市民の暮らしは、一応平和なこの日本で暮らしている身には、肌で実感できるものではなく、想像によってすら近づけない過酷さなのだと思った。来日したパレスチナ人画家が、日本人が生きて、暮らしている姿を見て語った「これが、人間が生きるということであるならば、私は、これまでガザで、ひとたびも人間として生きたことなどなかった」という言葉には胸を突かれた。

ガザ市民の精神状況も変化し、危機的なくらいに荒んできたという。精神科の診察室では、絶望を訴える声が絶えないという。かつては連帯意識があり、善良で強い人間関係で結ばれていたが、最近は、方々で内輪もめがあり、互いを責め立て、罵りあっている。自分の利益だけを主張し、家族でさえ助け合わない。人間性が他者の痛みを知る力だとするなら、私たちはそれを失いつつあるのか、と問うこともあるという。十年以上にもわたる封鎖は、彼らに最後に残された人間性をも剥奪しようとしている……。

そして、ガザの若者たちの間では薬物依存に加え、自殺も急増しているらしい。石油をかぶって、自らに火をつける。壁の中に貧困とともに閉じ込められた彼らは、生きるより死ぬ方がましだと考える。イスラームの宗教的禁忌を犯して地獄に落ちることと、封鎖下の生き地獄を生きることの間に、もはや違いが見い出せない若者たち。

ガザを統治してきたハマースは当初は民主的だったが、この一〇年以上強権的かつ独裁的となり、腐敗した集団に堕してしまった。若者をはじめ二〇〇万のパレスチナ人を絶望から救おうとせず、ガザにおける自分たちの政治権力を維持することしか念頭にない。それは西岸のファタハ政権も同様だと著者は指摘している。

去年一〇月初め、イスラム組織ハマスの戦闘員などがイスラエル側を急襲し、千人以上を殺害し、約二〇〇人を人質に奪った。これに対してイスラエルが行った大規模な報復と人質奪還作戦における相次ぐ破壊と殺戮は、ジェノサイドと非難されるほどで、それ

はまだ終わっていない。死者は三万人を超えたといわれる。人道などのモラルとか国連機関の裁定といった規範となるはずものが、イスラエルを擁護するアメリカが壁になって機能せず、無力化している。そんな姿をいつまで見せられるのだろう。

著者は、外語大でアラビア語専攻、カイロ大留学、モロッコの日本大使館勤務、地中海東岸地域遍歴といった経歴をもち、その間にパレスチナへの関心と共感を深めてきたものだと思う。そして、アラブ文学にふれ、刺激を受けたガッサーン・カナファーニーの『太陽の男たち』を本書の中で幾度かとり上げている。三人のパレスチナ難民の男たちは、クウェイトに出稼ぎに出るため運転手を雇った。運転手は三人を大きなタンクに隠して検問所に向かう。実はこのタンクがパレスチナ社会の比喩として描かれているのだと知らされた。

また、来日したあるユダヤ人が語ったという言葉を紹介している。

「闇の中、はるか遠くに浮かぶかすかな灯であっても、それが『私』のために灯されているものだと知っていれば、私たちは孤独ではない。絶対的な闇のなかでも、歩み続けることができる。真っ暗闇の山中の遠くに浮かぶ灯に、私たちもなれるのではないか。いや、そうならねばならないのだと思う。パレスチナに希望があるとしたら、それは、私たち自身のことだ」。この言葉はどのような闇、どんな孤独、どんな闘いを潜り抜けて生まれてきたものだろう。強靭な精神を感じた。

最終章には、アラブ人とユダヤ人が同じ食卓を囲んで歓談するという夢のような情景が記されている。今のところ、それはまだ夢ではあるけれど、その日は現実に到来するのだと信じたい。（了）

＊文中「ハマース」は原文通り。昨年一〇月七日以降の新聞等は「ハマス」と表記している。

水田とツバメ（三三）

佐藤ただし

・蘖（ひこばえ）

今年（二〇二四年）の一月と二月は雪が少なく、道路も田畑も顔を出していて、田んぼには枯れたひこばえが一面に姿を現している。

海市の前号（三四号）で佐藤洋一郎の著書を引用し、イネは多年草であると書いたが、多年草であれば、なぜイネは春にタネ播きをし、それを田植えと称して移植するのか、という疑問が出てくる。毎年タネ播きをしているのだから、やはりイネは一年草ではないのかと。

そうした疑問を持ちつつ、池橋宏著「稲作の起源」を読むと、現在、世界で栽培されているイネは大きく日本型とインド型に分けられ、日本型のイネは多年草の性質を多く持ち、インド型のイネは一年草の性質を多く持っているという。同じイネでも二つに分かれるのは、イネが栽培されるようになってアジアを中心に広がっていった歴史と関係があるようだ。

この著書を読むと水田稲作がどこで生まれ、どのように広がっていったのかについて、これまで幾つかの学説や研究が報告されていることが分かる。一つは植物学者、中尾佐助の照葉樹林農耕論で、イネの「雑穀としての栽培」はインドのサバンナ地帯で始まり、初期は一年草のイネのタネを焼畑に直播きしていたという説だ。当時、インドでは多種多様なイネ科の雑穀が栽培されていたが、その中から一年草のイネを選んで栽培したのだという。その後、イネの栽培はサバンナ地帯から離れて雨量の多い地帯に広がり、水田稲作となった。そして田植えの起源は、当時ネパールで行われていたシコクビエの栽培が、イネに置き換わっていったものと考えた。

また、作物学者の渡部忠世の説は、中国からインドシナ半島、インドにかけての山地や丘陵など、共通した文化圏で栽培イネが登場すると述べている。そして

栽培方法はここでも焼畑農耕により陸稲が栽培されていたという説だ。その焼畑農耕が丘陵と山間を降りて平野部に広がり、平坦地の稲作が陸稲から水稲へと展開したと考えた。

しかしこうした考えでは、どうして畑作から田んぼに変わってイネが栽培されるようになったのか、とか、なぜ直接タネを播かずに、苗代にタネを播いて苗を育てるようになったのか、といった問題に対する答えが、著者（池橋）にはしっくりこなかったという。

池橋宏は、大学卒業後に農林省（現農林水産省）に入り、イネの品種改良を長年行ってきた研究者だが、実際にイネの現場に携わってきた立場からすれば、これまで発表された学説や報告書は、日本の稲作が春にタネ播きをして植え、秋には稲刈りをするというサイクルが、いかにもイネが一年草のように見えるので、その前提で稲作の起源を考えてきたように見えた。

そこで発想を変え、イネはタネにより株を増やしていったのではなく、サトイモのように株分けをして湿地で育てたのが始まりではないかと考えた。そして中国の雲南省からベトナム、タイ、ラオス、ミャンマーなどで、現在も根菜農耕を行っている場所へ行って調査をした。その結果、華南からメコンデルタまで、イネ科の植物から根菜類まで多種多様な植物が野生と栽培の混合した状態の中で作られていることが分かった。特に根菜農耕により、水辺の有用植物を株分けで栽培することが、広く行われていることを確認できた。

私などもサトイモのタネイモを畑に植え、何度か「サクリを掛ける」といって根元に土寄せをしているが、サトイモは高温には強いが乾燥を極端に嫌う作物だという。それは池橋によると、この作物が元々栽培されていた場所が水辺の近くで、水分の多い場所で作られていたからということになる。著者が調査したタイやベトナムでは、田んぼにサトイモが栽培されていたという。また日本でも山形や沖縄でもサトイモを田んぼに植えているところがあるという。サトイモは畑の作物という観念があったが、湿気の多い沼地や田んぼで栽培されているとは驚いた。

次にイネはどのような環境の下で、どのようにして栽培化されていったのか。著者は中国南部の南寧からベトナム、タイ、ミャンマーなどを調査した時に、こ

れらの作物に混じって自然の田んぼのような浅い沼地に、野生のイネが自生しているところを見てきた。そこで「野生のイネは、はじめから田んぼのような水溜りで多年生のものとして自生していたこと、春にその株が大きくなってくると、それを株分けして増やしていったのだろう」と考えた。

その考えを推し進めると、「多年生の野生イネが生えている田んぼのような水溜り」を原始的な田んぼと呼べば、「田んぼがあったからイネが栽培された」と考えられる。その小さい田んぼに生えたイネを親株とし、その株元に増えたひこばえをとり、他の場所に植えて行ったとすれば、苗代や田植えという形態の説明が容易だ。そしてそこに結論を持ってくるには、「イネの栽培」という農耕の前に、単に家の周りに他の植物と一緒にイネは趣味的に植えられていたのではないかと考えた。というのはイネが登熟するとスズメのような小鳥が大勢で食べに来るが、家の周りだと、鳥も簡単には近づけないから、被害が少なくて済むためだ。

日本で見受けられるイネの姿は品種による違いはあるが、一株の穂数が一五本から三〇本位で、草丈は八〇センチから一メートル程度の長さだ。また一穂には八〇粒から二〇〇粒位の籾が付いている。しかし野生のイネは穂数や粒数が少なく貧弱で、栽培するだけの価値が無いような姿だったという。それはイネが元々多年生のため、株元や茎の節から分げつが出ることに力を注ぎ込むため、籾を多くつける必要がない。そのため初めは薬とかお茶として使われた可能性があるという。

今から六千年以上前、中国の長江（揚子江）の中、下流域でイネ作りは始まったと考えられている。当時は越という国で、現在のタイ語に近い言語を話し、船を操り、漁撈と根菜農耕を生業とする人達だったという。

そこに住む好奇心の強い村の女性たちが、家の周りの沼地に生えていた野生のイネを、株を分けて他の沼地に植え始めた。そして摘み取った籾を取り、薬とかお茶として飲んでいた。それを何年も繰り返えしているうちに、イネの穂も突然変異的に大きなものも出始め、田んぼにタネを落とし、或いは株元から分げつし

た籾と交配し、多年生のイネとして収量が増えて行った。それまでサトイモやクログワイなどの根菜類を主食にしていた人々は、サトイモに比べコメは長期間保存が利くため、次第にサトイモに代わって栽培してゆくようになった。また、石臼のようなものが作られ、比較的楽に籾の殻を外せるようになると、栽培面積が増えて行ったのではないかと著者は考えた。

一方でインド型のイネは何故一年生の性質を持つようになったのか。長江流域で生まれた多年生のイネが栽培イネの基本になったが、タイ語系の稲作民によって南下西進し、インド東部へ進んだ。西に進んだ栽培イネはその経路に存在した野生イネと交配し、遺伝的な基礎が多様化し、さらにインドの気候に合った雑穀栽培に適合するような変化を遂げて、一年生のインド型のイネが成立したと著者は考えている。

ぶんげつは漢字で分蘖と書く。この漢字は蘖(ひこばえ)を分けるという意味だと著者は言う。ひこばえは親株の脇から新たに出てきた芽でイネの子供だ。それは次の世代へイネというものを繋いで行く仕組みでもある。そしてコメを食べてそれを生業にしてきた人達は、ひこばえのように子供を育て、次の世代にイネと田んぼを引き継いできた。しかし時代は変わり、ひとりひとりの生き方はその一代で終わり、一年草のような生き方が普通になって来た。

毎年作っていたイネが一年草ではなく多年草であるという、その答えが田んぼのひこばえの姿にあった。近年の異常気象で、高温に対応する品種改良などが急がれ、日本より南で栽培されているイネとの交配などが進むかもしれない。それに伴い、多年生という性質も変わってゆくのだろうか。

雑　記 (34)

横　山　　仁

ケーブルテレビで、昔？のドラマ（「絶対零度～未解決事件特命捜査～」）をみていたら、主題歌が英語の歌のように流れて、外国の歌かなとおもっていたところ、LOVE PSYCHEDERICO というバンドの「Shadow behind」だった。

Shadows and lights in the morning
その終われない僕の　behind
また拭えない日々の　behind
Shadow behind

Hidden door nobody knows it
その知られない部屋で alone
まだ始まらない僕は alone
Leave me alone

歌詞だけみていると、どうということもないが、これが早口で歌われると、日本語も英語の歌のようにきこえてくるのである。

そういえば、2009 年（平成 21 年）（全 16 話）にＮＨＫＢＳで放送した、韓国の「ニュース報道の現場の様子を描く職業ドラマ」「スポットライト」の主題歌も、こんな雰囲気だったような気がする。

＊

「精選復刻　紀伊國屋新書」に、窪田般彌著『日本の象徴詩人』がある。オビに、「上田敏から吉田一穂まで 9 人の詩人を取りあげ、著者独自の日本の近代詩を創造する」とあるが、新書で出ているころは興味がなく購入しなかった。いまみると、同時代の文人の評が興味深い。

「近代の散文で、この白秋の感覚的な散文以上に美しいものはない。」とか、芥川竜之介（ママ）の言葉として、「詩

歌はいかなる時代にも『新感覚派』のために進歩するものであって、白秋は谷崎潤一郎とともにもっとも記憶されるべき『新感覚派』であった。」などを紹介している。

あらためて、芥川の文庫本『文藝的な、餘りに文藝的な』とか『西方の人・侏儒の言葉』をひっぱりだしてきたりしている。佐藤春夫の「退屈読本」もあるな。

＊

年賀状でYouTubeの興味深いサイトを紹介したが、スペースの関係で全部は載せられなかったLizzy Channelもいい。ＥＵでの農民のデモといった、海外での重要な情報は、これまでなら、及川幸久氏のチャンネルでもみられたが、及川氏はYouTubeから完全にＢＡＮされて（抹殺されて）、いまではＸ（旧ツイッター）でしかみられない。

＊

欧州議会を取り囲む　ブリュッセルに農民が集結
2024.02.02.

（Lizzy Channel）

アメリカの著名なジャーナリストのタッカー・カールソンがロシアのプーチン大統領にインタビューした動画が、全世界で10億万回再生されたといわれる。

先のLizzy Channelでも、吹き替えや、字幕付きの動画をみることができる。

また、このインタビューについて、亀さんは「蟻の一穴」で紹介している。

【緊急特番】西側メディア黙殺！プーチン×カールソン・インタビューの衝撃と真実[桜R6/2/13]

（引用開始）

そのプーチンが２月８日、タッカー・カルソン氏のインタビューを受けた。そして、これが蟻の一穴になるのではと思ったのである。

インタビューを敢行したカルソン氏に対して、グローバリストらは大慌てだったようで、同氏に対して常軌を逸した人格攻撃を見せていたので笑えた。一例としてヒラリー・クリントン元国務長官、“useful idiot”（役に立つ愚か者）とカルソン氏を罵ったものである。そして、大手マスゴミの「プーチン＝悪魔、ゼレンスキー

（Front Japan 桜）

＝正義」キャンペーンに、すっかり洗脳されてしまった人たちの場合、何が起きたのかと呆然としたことだろう。

だが、そのプーチンを高く評価している識者も少なからずいたのであり、その一人が伊藤貫氏だった。その伊藤氏が過日百歳の生涯を閉じた、キッシンジャーについての動画を公開しているが、キッシンジャーも伊藤氏と同様、プーチンを高く評価していた一人であった。

伊藤氏によれば、キッシンジャーは自身最後の著作となった『Leadership』の結語で、「この半世紀、欧米諸国で本当の思考力を持っている政治指導者が出てこなくなった」と書いていたと言う。しかし、キッシンジャーから見て一人だけ例外がいたようで、それがプーチンであった。

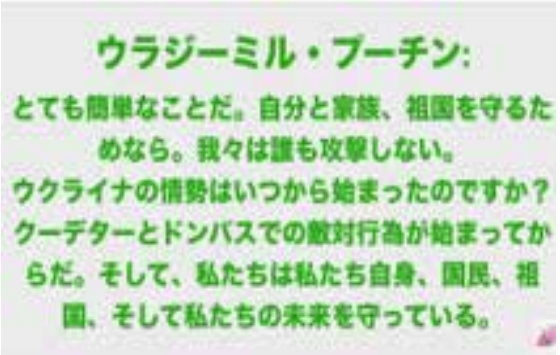
今回のプーチンへのインタビューについては、多くのユーチューバーが動画にしていたが、個人的に最も良

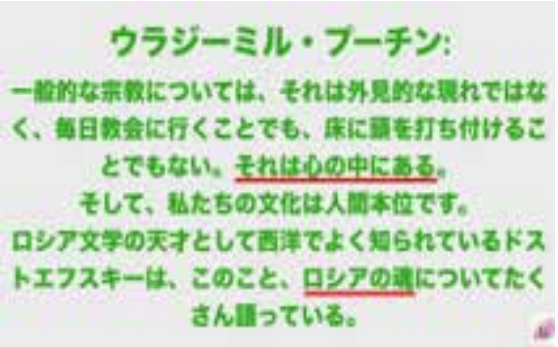
かったと思ったのが及川幸久氏が登場する動画（注、17ページ、「世界史的転換点としてのプーチン×カールソン・インタビュー」）で、同氏によるプーチンの歴史観と宗教観の解説は秀逸であった。二時間近い動画なので、時間の無い読者は及川氏が登場する46:01あたりから見るといいだろう。中でも、プーチンの宗教観を抉り出してみせた及川氏の言葉は、同動画の白眉であったとすら個人的に思う（1:11:53～）。

（引用終わり）

この「桜チャンネル」の冒頭で、司会の水島総氏は、「ウクライナの運命は台湾有事の際の日本に似ています。私たちはウクライナを負けさせるわけにはいきません。」という櫻井よしこのトンチンカンな発言を取りあげ、アメリカの手先（バイデンやネオコンなど）になっての発言に、戦後保守の限界というより、欺瞞、偽善があらわれているという。

ほんど、ケツ丸出しやがな、櫻井よしこ。能登復興支援より、ウクライナ復興支援で金儲け。





（亀さんの「蟻の一穴」）

あとがき

◆先日、由利本荘市の鈴という漁港にシノリガモという冬鳥を観に行った。この鳥のオスは紫黒色と白と赤栗色の不思議な美しさを持った鳥で、英名は「道化師」に由来するという。例年は十数組のつがいを観ることができたが、今年はオスが1羽だけ港の近くを泳いでいた。3月中旬まではいると思うので、もう一度行こうと思っている。（T）

◆腰痛でコルセットをはめたら、ズボンが窮屈になった。一回り大きいズボンを買わんといけんかのう。（J）

◆昨冬見つけた散歩道は、瀟洒な住宅があるかと思えば、藪を背景にして不動産屋の看板の立つ空き地があったりする。庭木や生垣のあちこちで、日に日に赤い花がつき始めて気がついた。椿は春の木。今年は早く冬が去りそうだ。（S）

◆昨年12月15日、吉沢悦郎さんが他界された。享年85。私が20歳代前半に出会った頃から詩作品はもとより批評に特色のある人であった。当「海市」にも創刊時から読後感を寄せていただいた。氏は、戦後の引揚者という立場から独特の”負い目”？を深く沈潜させながら、自己存在の位置付けを希求しもがいていた詩人でもあった。2019年8月に刊行された最後の詩集「ノスタルジア」にその姿が顕著に表出されている。昨年10月24日にいただいた電話が最後となってしまった……。心からご冥福をお祈り致します。（B）

「海市」 第35号
2024年3月11日発行
発行　書肆えん
秋田市新屋松美町５－６　横山方